

いつもお世話になりありがとうございます。昨年12月、多くのファンに見守られながら小惑星探査機『はやぶさ2』が50億キロの挑戦に旅立ちました。目指す小惑星に到着するのは2018年。着陸して石を採取し、東京オリンピックが開かれる2020年に地球へ帰ってくる計画です。『はやぶさ2』に負けないよう、5年後を目標に新たな挑戦を試みたいですね。

痛快! えだまめ君

画:ほりひろみ



知っとこ! 「税務のマメ知識」

【外形標準課税の対象が拡大されると?】

日本の法人税の実効税率は、欧州やアジア各国に比べて高い水準にあります。この税率を引き下げするためには、別の財源確保が必要だとされています。そして、その代わりに財源確保のひとつとして挙げられるのが、法人事業税の「外形標準課税の対象拡大」です。企業はその活動をするにあたり、地方自治体より道路や防災、警察など各種の行政サービスを受けています。法人事業税は、「この経費を企業が分担するべきである」という考えにもとづく地方税です。行政サービスは黒字企業も赤字企業も受けています。

そのため、ほとんどを黒字企業で負担している「事業所得だけを基準とする従来の方式」ではなく、赤字企業も負担する「事業規模などに応じて課税する外形標準課税」は、より公平に税を負担する制度とも考えられています。

外形標準課税制度は平成15年度の税制改正で創設され、平成16年4月1日以後開始の事業年度から適用されています。現在この制度対象になるのは、資本金の額または出資金の額が1億円を超える法人です。ただし、これまでの所得課税法人に限るものとし、公共法人等、人格のない社団等、特別法人などは除かれます。

新たな財源確保のためにこの対象を中小企業にまで拡大することは、「中小企業の新たな負担となり地域経済に悪影響が及ぶ」と心配する声も出ています。



副所長

たなべしげお

田邊繁雄の ~税務の豆知識



相続税の大改正 (平成27年1月1日~) がついに・・・。

相続税なんて、我が家は関係ないって!・・・そうも言っていられなくなりました。

年が明けて・・・、平成27年1月1日以後に相続が発生した場合の相続税増税が現実のものとなりました。

相続税は概ね、被相続人が遺した財産(正しくは、一定の贈与財産を加算等したり、借入金や葬儀費用等を差引きした残りの財産)がいわゆる「基礎控除額」を超えた場合に申告や納税を行わなければなりません。

昨年までは、「基礎控除額」を「5,000万円+1,000万円×法定相続人の数」で計算していましたが、本年の相続の発生からは「3,000万円+600万円×法定相続人の数」に改正されています。

例えば、相続人が配偶者と子2名の3名のケースでは、8,000万円だった基礎控除が4,800万円となって、40%カットされます・・・。上記の遺産が8,000万円の場合、昨年までの相続税は「0円」でしたが、配偶者が遺産の1/2を相続したケースでは、『175万円』の相続税の納税が必要になります(他のケースでは最大で『350万円』の納税)。

みなさん、いかがですか?これを機会に「相続税シミュレーション」を試してみませんか。ご相談お待ちしております!!!

社員のひとこと日記

まだまだ寒い日が続きますね。 育児休暇でお休みをいただいております、竹長です。
最近、この歳になって、どうよの魅力をひしひしと感じています。
はる・なつ・あき・ふゆのうた、行事のうた、こもりうた、わらべうた、などこんなにもたくさん
子供のための歌がある国はないそうです。(由紀さおりさんが言っておりました)

童謡は、日本語の歌詞が美しく、歌詞が伝わるようにうたいやすく作曲されています。
きやりーぱみゅぱみゅの歌は誰にでも歌えるわけではないけれど、童謡は誰でも歌うことができます。
そしてこの童謡のような日本の美しい景色が未来に続いていくといいなと思うのです。
春が待ち遠しいですね。暖かい春が訪れるまで、風邪などひかずに元気でお過ごしください。

春のうらの 隅田川
のぼりくだりの 船人が
權(かひ)のしづくも 花と散る
ながめを何に たとふべき



365日が楽しくてたまらない! 「商売のヒント」

今月の商売のヒント:【胸に秘める】

あの計報から約3ヶ月が経ちます。日本人の美学を集約したような稀代の名優、高倉健さんは、最期までご自身のスタイルを貫き通して旅立たれました。高倉さんは読書家で、特に山本周五郎の描く男たちの世界に強く共感されていたことは有名です。中でも『晩秋』という短編がお好きだったと聞きました。



藩の立て直しを図るために情け容赦ない政治を執った進藤主計(かずえ)は、君主が代替わりすると過去の悪政の裁きを受ける身となりました。審判が下るまでの間、主計の身の回りの世話をすることになった都留(つる)は、かつて主計が切腹を命じた家中の娘でした。亡き父の遺志を果たすため懐剣を胸に主計の世話を続けていた都留はある日、主計と客人の会話を盗み聞きし、主計の真意を知ることになります。最初から覚悟の上で悪役となり、世間からどんなに恨まれようと藩政改革のためにたゆまず屈せず闘ってきたこと。目的が叶った今、「進藤主計」

を悪政の首謀者として裁くシナリオを描いているのは、ほかならぬ主計自身であること。切腹を命じたある家中に対して今でも堪えがたい無念の気持ちを抱いていること――。

物語の最後、主計は「自然の移り変わりの中でも、晩秋という季節のしずかな美しさはかくべつだな」と晩秋を称えます。都留はそれを聞きながら、すべてを自分の胸の内に秘めて人生の幕を引こうとする主計の人生に思いを馳せるのでした。

「想いの強さ」というものを考えたとき、言葉に出したり人に伝えたりすることが自分の活力になる場合があります。成功者の多くが「夢を語れ」と指南するのは、言葉のパワーが物事を動かすことを体験的に知っているからでしょう。

しかし、逆もまた真なりではないでしょうか。つい自分を主張したくなるのが人間ですが、強い信念は胸に秘め、愚痴も言い訳もなしに課せられた使命を果たし、一切の責任を自分が負った進藤主計の気高さは、そのまま孤高の名優に重なります。改めて高倉健さんのご冥福をお祈り申し上げます。

